慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	古版経済書解題 一千七百七十六年版エチィエンヌ・ボンノー・ヅ・コンディヤック著 相互的関係に於いて考察せられたる商業と政治
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1939
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.33, No.11 (1939. 11) ,p.1467(61)- 1483(77)
JaLC DOI	10.14991/001.19391101-0061
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19391101-0061

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

古版經濟書解題

一千七百七十六年版エチィエンヌ・ボンノー・ヅ・コンディヤック著

『相互的關係に於いて考察せられたる商業と政治』

高橋誠一郎

一

吾人は本誌前號（第三十三卷第十號）に掲載せる小篇『效用價値學說史の一節』に於いて、第十八世紀後半期の佛蘭西に在つて、アンヌ・ロベール・ジャック・チュルゴオ及びルイ・フランスワ・ヅ・グラスランの如き、心理學的主觀的に經濟價値現象を說明せんとせる諸家を出したのであるが、而も、彼れ等の所說と後世の限界效用價値學說との距離は尙ほ甚だしく隔絕せるものであることを述べ、而してエチィエンヌ・ボンノー・ヅ・コンディヤックに至つて斯學說への接近は幾分大と爲る旨を一言附記した。吾人は今、本欄中に於いて、彼れの經濟上に於ける主著『相互的關係に於いて考察せられたる商業と政治』（Le Commerce et le Gouvernement, considérés relativement l'un à l'autre. Ouvrage élémentaire, par M. l'Abbé de Condillac, de l'Académie Françoise, & Membre de la Société Royale d'Agriculture d'Orléans.）に解題を施し、以つて前稿續編の一たらしめんとする。

コンディヤック(Étienne Bonnot de Mably de Condillac)は佛國グルノーブルの名門の出であつて、一千七百十五年九月三十日に生れた。(彼れの生年を一千七百十四年と傳ふる學者もある)。社會主義的思想家アッベ・ヅ・マブリィ(Gabriel Bonnot de Mably)は彼れの兄である。幼時、虛弱であつたが爲めに、學業の進歩が後れたが、青年時代にはルソー(Jean Jacques Rousseau)、ディドロオ(Denis Diderot)、デュクロー(Charles Pinot Duclos)等を其の友人中に數へた。彼れは一千七百六十八年、佛國科學學士會員に擧げられ、ルイ十四世の孫パルマ公(Prince de Parme)の師傅と爲り、彼れの爲めに幾多の書を草した。彼れは又、ミュロオ僧院長(Abbe de Mureaux)の肩書を有し、一千七百八十年八月三日、ボーゾンシィに近いフリュの所領に長逝した。

コンディヤックは、英國逗留中、ジョン・ロックの諸著を讀んで、深く之れに動され、先づ彼れの學徒として其の哲學者の生涯を始めた。ヴォルテールが散漫なる方法に於いて佛國に弘布せしめんと努めたロックの哲學を、コンディヤックは系統的、集中的に展開せしめたと稱せられてゐる。先づ彼れの主著として擧げらる可きものは一千七百四十六年の Essai sur l'Origine des Connaissances Humanines. 及び同四十九年の Traité des Système. であつて、彼れは箇中に於いて、スピノザに反對し、又ライブニッツが總べての知識の起源を經驗に求むることなきの故を以つて、之れを非難した。最後に彼れは一千七百五十四年の Traité des Sensations. 及び Traite des Animaux. に於いて、彼れとロックとの分岐點を明かにした。ロックが吾人の觀念の二泉源、即ち感覺及び反省を區別するに反し、コンディヤックは是れ等のものが一の泉源、即ち感覺の二形態に過ぎざることを主張した。蓋し、先づ第一に、反省は素と感覺以外の何物でもなく、第二に、そは諸觀念の泉源たるよりも、寧ろ是れ等のものが之れを通じて覺官より流れ出づる運河たること多きものなるが故である。記憶、想像、注意、判斷及び推理の如き所謂知的過程

LE COMMERCE
ET
LE GOUVERNEMENT,
Considérés relativement l'un à l'autre.
OUVRAGE ÉLÉMENTAIRE,
Par M. l'Abbé DE CONDILLAC, *de l'Académie Françoise, & Membre de la Société Royale d'Agriculture d'Orléans.*

Vis consili expers mole ruit sua;
Vim temperatam Di quoque provehunt
In majus. . . . .

A AMSTÉRDAM,
Et se trouve à PARIS,
Chez JOMBERT & CELLOT, Libraires, rue Dauphine.

M. DCC. LXXVI.

の總べては變形せられたる感覺以上の何物でもない。而して、精神中には、そが諸覺官よりの印象を通じて受くる諸觀念を除いては何物も存せざることを立證するが爲めに、コンディヤックは先づ躾官のみを賦與せられたる塑像人間（Hommestatue）を想像し、次いで、如何にして總べての心的諸力が是れよりして發達せしめられ得るかを示さんとした。「思ふのは感ずるのである」（Penser est Sentir）と云ふ有名なる彼れの金言は感覺學派の基調と爲つた。

二

一切の認識の泉源として唯り感覺のみを承認し、あらゆる知的過程を以つて其の變形と見たるコンディヤックは、這般の變形を說明するが爲めに社會的經驗に依賴した。社會的經驗は言葉を創造し、是れに由つて單純なる觀念は先づ表明せられ、次いで又、一般觀念に結合せらるゝを得るのである。人間が諸觀念を聯合せしめ、結合するを得て、彼れを獸より區別するを得せしむるは言語の賜である。更らに下等の動物は瞬間の感覺の裡に生くるに反し、人間は其の感覺を複雜なる觀念に結合し、而して、言葉若しくは記號の形態に於いて、是れ等のものを過去より收受して、之れを次ぎの世代に傳へることが出來る。觀念構成上に於ける言語の重要性に關する這箇コンディヤックの理論の系論として、あらゆる科學の發達に取つて必要なる豫備は、其の特殊の術語の創造、其の諸主要概念の定義であると云ふことが推論せらるゝ。斯くて、彼れは一千七百七十六年に至つて出版せられた前記『商業と政治』に於いて、經濟學（Science économique）の爲めに這般の任務を遂行せんことを企圖したのである。（Le Commerce et le Gouvernement, 1776, p. i-ij.）。

彼れは其の著の三部分を出版せんことを企圖した。第一部は商業若しくは經濟學の原理を說明するものであり、第二部は商業の政治に對する關係及び其の相互に對する影響を研究するものであり、第三部は是れ等第一及び第二部に於いて展開せられたる諸原理の適用を示す實際的例證の蒐集を包含するものである。（ibid., p. ij.）。而も、不幸にして第三部は遂に出版せらるゝことなくして終つた。

コンディヤックは重農學派に屬する人々の友人であり、同學派より出發するものではあるが、而も、價値を以つて全然人間の欲望に發するものと觀、而して工業及び商業を以つて不生產的と做す此の學派の主要理論に反對する。同學派の正系を傳へたル・トローンは彼れと議論を交換して、其の分離を避けしめんとしたのであるが、彼れは終に之れを說服することが出來なかつた。而も、彼れは多くの理論を同學派より取り入るゝものであつて、決して其の反對者を以つて目さる可き人ではなかつた。

三

コンディヤックは價値を以つて經濟學の中心問題と看做し、價値論を以つて其の著を始める。而して、彼れは諸物の價値は其の效用の上に基礎を有するものと思惟した。此の效用に從つて、吾人は之れを吾人が使用せんことを欲する諸用途に幾分適合せりと估料するのである。而して、此の估料は吾人が「價値」と呼ぶ所のものである。一物件が價値を有すると稱するは、そが一定の用途に對して良好であるか、若しくは吾人が之れを良好なりと估料すると云ふに等しきものである。（ibid., p. 9-10.）。彼れに在つては、現代の主觀的價値理論に於けると等しく、效用は物の內在的實質的性質を意味することなく、或る個人が欲望滿足の目的に對して一財貨に附せる重要性を指稱するものである。價値は物の裡に於けるよりも寧ろ我れ等の之れに對する估料の裡に存する、而して這般の尊重は我れ等の欲望と相對的である。そは吾人の欲望が其れ自體增減するに從つて增減する。（ibid., p. 15.）。コンディヤックは又、特に或る特殊の物件をして價値を有せしむるものは其の效用其の者に非ずして、其の效用に關する吾人の

知識なることを指摘する。或る者は、吾人が諸物に就いて抱懷する判斷より獨立せる之れに固有なる絶對的品質として價値を觀んとするの傾向がある、而して斯くの如き混亂せる總念は誤れる推論の根元である。斯くて、諸物は是れ等のものがそをして吾人の用途に適せしむる品質を有するが故に價値を有するものではあるが、若し吾人にして是れ等のものが實際に斯くの如き性質を有することを斷定することがなかつたならば、是れ等のものは吾人に對して何等の價値をも有せざる可きことを想起することが必要である。是に於いて乎、是れ等のもの〻價値は主として吾人が是れ等のもの〻效用に就いて行ふ判斷に存するのである。(ibid., p. 19-20.)。即ちコンディヤックに從へば、價値は物の屬性に非ずして、其の有用性に對する吾人の感覺を表示するものである。

コンディヤックは又、效用のみが唯り價値を決定するものに非ざるの事實を明確に認めてゐる。即ち、啻だに效用のみならず、吾人の要求する物件の供給狀態も亦、吾人が是れ等のものに對して有する估料の程度に對して原因たるものである。彼れは變化しつ〻ある數量が財貨の價値に及ぼす結果を說明するの重要性を會得した。曰く、諸物の價値は欲望の上に基礎を有するが故に、より緊切なる欲望がより大なる價値を諸物に賦與し、又、より緊切ならざる欲望が是れ等のものにより小なる價値を賦與するは當然であると。其れ故に、諸物の價値は稀少なる際に增加し、而して、夥多なる際に減少する。そは夥多なる際には減少して無と爲ることすら在り得るのである。例へば、過剩なるものは、人が之れに對して何等の用をも有することがなかつたならば、價値を失ふに至る可きである。(ibid., p. 11.)。又、遠く隔りたる欲望は現存の欲望に比して或る物件に價値を與ふること少なかる可きである。斯くて、效用が依然として同一であるならば、諸物の價値の大小は是れ等のもの〻稀少若しくは其の夥多、或ひは寧ろ吾人が是れ等のもの〻稀少若しくは其の夥多に關して有する意見に基礎を有するものである。茲に「效用が依然として同一であるならば」と稱したのは、是れ等のものを等しく稀少若しくは等しく夥多と想像するに於いては、人は彼れが是れ等のものをより多く、若しくはより少なく有用と判斷するに從つて、是れ等のものが價値を有することがより大若しくはより小と判斷するは疑ひなき所なるが故である。(ibid., p. 14.)。

コンディヤックを以つて觀れば、物は通說に於けるが如く、其の費す所が大であつたが爲めに、價値を有するのではなくして、價値有るが故に、人々は之れに對して費用を投ずるのである。水の如き極めて必要なる物と雖も、「そは之れを取得するが爲めに何物をも費すことなきが故に、何等の價値をも有することなく、而して、そが運搬に由つて取得する價値は、其の價値ではなくして、そは運賃の價値である」と稱せられる。而も、コンディヤックに從へば、人が何等の價値なき物を取得するが爲めに運賃を支拂ふは不可思議である。(ibid., p. 14.)。一物件は、人の想像することある可きが如く、そが費さしむるが爲めに價値を有するのではなくして、そが價値を有するが故に、そは費さしむるのである。(ibid., p. 15.)。吾人が或る物を欲望すると同時にそは價値を有する。而して、そが價値を有するは單に這般の理由のみに據るのである。費用は價値の原因に非ずして、其の結果たるものである。

彼れは費用を以つて單に經費より成るものと觀ずして、勞働より成るものと思惟した。然らば勞働とは何であるか。そは或る利益を獲得するを目的とする行爲若しくは行爲の連續である。(ibid., p. 16.)。河岸に於ける水すらも價値を有する。そは又之れを取得するが爲めに身を屈するの行爲を費さしめる。斯くの如き行爲は頗る尠少なる勞働ではあるが、而も亦、水は最小可能なる價値を有する。是に於いて乎、其の水は之れを取得するが爲めに遂行せらるゝ勞働に値する。(ibid., p. 17.)。

彼れは前述の如く、效用のみが唯り價値を決定するものに非ざるの事實を認むるものではあるが、而も、一物件

はそが單に稀少性の一定度位を有する時には價値を有することを得ると做すの見解を有するものではなかつた。「稀少性の一定度位！(Un certain degré de rareté!)」は余の了解せざる所のものである。吾人が、吾人は其の使用に對して或る物を十分に有することがないと判斷する時に、そは稀少であり、吾人が、吾人は其の要求するよりも以上に有すると判斷する時に、そは豐富であると余は認める。要するに、余は人が是れよりして何物をも成すことなく、又、人が是れよりして何物をも成し得ざる物は何等の價値をも有することなく、而して、之れに反し、一物件が一の效用を有する時は、そは一の價値を有すると認める。而して、そが之れをして有用ならしむるものを有することがなかつたならば、そは稀少に於いてより大なる價値を有し、夥多に於いてより小なる價値を有することがないであらう」。(ibid., p. 18-19.)。

是れに由つて觀れば、コンディヤックは效用と數量との間に於ける關係を把握し、而して、價値に對する這箇二個の說明を結んで一と成すの道を體得し、數量は單に效用に對する其の作用が需要を强大ならしめ、或ひは薄弱ならしむるに由つてのみ價値に影響するものであることを認めた。彼れは其の心理學的說明に於いて、ガリアニ、グラスラン及びチュルゴオ等に比して更らに徹底せるものではあつたが、而も限界的分析に到達する迄には未だ可成りの距離を殘して居つた。

四

コンディヤックは其の效用理論を交換、價格及び分配の問題に對して可成りに矛盾なく適用する。彼れは本書の第一部第一章「諸物の價値の基礎」を終るに當つて曰く、「余が斯くも强く這般の總念に注意を惹かれたのは、そが此の著全體の基礎として役立つが故である」と。(ibid., p. 20.)。而して彼れは其の第二章「諸物の價格の基礎」に入つて、二個の交換の場合を論述する。第一の場合に於いては、余は汝の餘剩の葡萄酒に對して余の餘剩の小麥を交換し、第二の場合に於いては、余の餘剩は汝に取つては十分であるが、而も、汝の餘剩は余に取つては十分でないとする。此の場合に於いては、余は余の所要の差額を他所に於いて滿足するが爲めに幾分を殘さんことを欲するが故に、余は汝の餘剩に對して余の餘剩の全部を汝に與ふることがないであらう、而して、汝は余の餘剩の總べてを欲望するが故に、何等是れよりも少なきものに對して汝の餘剩の總べてを與ふることがないであらう。幾多の相互的附値の後に於いて、初め葡萄酒を以つて小麥を評價せるものと、小麥を以つて葡萄酒を評價せるものとの間に存する評價を以つて賣買契約は取り極めらるゝのである。總べての者が大體に於いて幾許かの小麥に對して幾許かの葡萄酒を與ふることを同意せる時には、葡萄酒との關係に於いての小麥及び小麥との關係に於いての葡萄酒は各々大體に於いて總べての者によつて承認せらる可き價値を有する。而して、交換に於いて大體に於いて承認せられた此の相對的價値が諸物の價格の基礎たる所のものである。價格は、是に於いて乎、他の物の見積られたる價値との關係に於ける或る物の見積られたる價値に過ぎざるものである。諸物は交互的に相互の價格である。(ibid., p. 20-25.)。

彼れは更らに語を進めて言ふ、第一に「諸物の價格は吾人が是れ等のものに就いて形成する尊重と相關聯する」、否、寧ろ、そは吾人が他の物との關係に於いて或る物に就いて行ふ尊重に過ぎざるものであると。而して、固と「價格及び尊重」(prix & estime)は完全に同義の語であり、又、第一のものが初め表示せる觀念は、第二のものが今日表現する觀念と同一であるが故に、そは敢て異とす可きでない。第二に「是れ等のものは交互的に相互の價格である」。「價格及び價値」(prix & valeur)なる語は相互無差別に使用せらる可きではない。吾人が或る物に就いて欲望を有するの時、そは價値を有する、そは唯り是れのみに由つて、又、何等交換を行ふの問題の存する以前に於いて、

之れを有する。是れに反して、そが價格を有するは唯り交換に於いてのみである。而して、其の價格は、交換に在つて吾人が其の價値を他物の價値と比較する際に、吾人が其の價値に就いて行ふ尊重である。(ibid., p. 25-27.)。

コンディヤックは第三章に於いて、「價格の變化に就いて」論ずる。價格變化の原因は、第一には、夥多及び稀少である。即ち是れ等のものは欲望の大さを變ずるが故である。第二には、相互に對する諸物の相對的數量に於ける變更、換言すれば、他の物を交換せんと欲しつゝある人々の數との關係に於いての或る物を交換せんと欲しつゝある者の數に於ける變更である。斯くて價格は市場の異なるに從つて變化し、而して常に競爭に由つて決定せられる。絶對價格と云ふが如きものは存することがない。(ibid., p. 27-30.)。

五

コンディヤックは、次いで、如何にして商業が富の高を增加するかを示す。(ibid., 1re partie, ch. vi.)。效用理論より出發せるコンディヤックの見解は、廣義に於ける農業のみが唯り生產的であり、商業と工業とは是れ等のものゝみにては全然不毛のものであると云ふ重農學派的觀念と明かに相容れざるものである。是れ等の觀念は、必然價値が交換過程中に於いて創造せらるゝを得ることを拒否する。既に貨物中に附着しつゝある價値が交換に際して增加せられたとしたならば、斯くの如きは他の當事者による一方の當事者の不期且つ暫時の欺瞞以上の何者にも基くこと能はざるものである。然るに、價値にして單に欲望の滿足に過ぎずとしたならば、交易は同時に二個の欲望を滿足せしむるに於いて、二個の價値を創造するのである。交換に際しては、兩當事者の各々はより大なる價値に對してより小なる價値を與ふるものと考へる。然らざれば、彼れは交換を行ふことなかる可きである。交換せられた價値は同一であると稱するは正しくない。却つて、各當事者はより大なる價値と交換してより小なる價値を與へんことを求むるのである。此の方法は兩者に取つて有利なるを示すが故に、疑ひもなく、兩價値は同一ならざる可らずと云ふ思想を生じたのである。然しながら、吾人は若し各々が利得するとしたならば、兩者は少く與へて、多く得たるものでなければならぬと云ふ結論に到達す可きである。(ibid., p. 55-56.)。

彼れは次いで賃銀を論じ而して何故に賃銀が種々なる業務に於いて相違するかを明かにする。(ibid, 1re partie, ch. viii.)。

價値は單に效用に過ぎざるものであり、而して效用其の者は正さに物と是れ等のものに對する吾人の需要との適合に外ならずとするならば、物と欲望との間に於ける這般の調和を生ぜしむる要素は何であるか。自然は之れを確立することが頗る稀有である。自然は屢々吾人が何等の欲求をも有せざる物に於いて多產であつて、無用なる物に就いて豐富である。物は人間の勞働によつて改造せられて有用と爲る。生產は實に物に新形態を與ふることを意味する。(ibid., p. 72.)。果して然らば、農業的生產と工業的生產とは共に既存の物件を改造するものなるが故に、是れ等兩者の間には何等の相違も存しないではないか。土地が產物を以つて蔽はれた場合と雖も、既に存在せる物以上に何等附加的の物質は存することがない。そは新形態を賦與せられたるに外ならない。而して總べて自然の富は斯くの如き形態に於いて存する。工匠及び地主が農業者に依賴することは事實であるが、而も後者は又、工匠に依賴しなければならぬ。若し或る者が、工業に對して農業を選む可きか、又は農業に對して工業を選む可きやを問ふたならば、彼れは、人は特に其の孰れをも選ぶ可きではない、彼れは兩者に從事す可きものであると答べる。(ibid., p. 328.)。

斯くて、自然の資源を欲望の滿足に適合せしむる總べての行爲、即ち農業、工業及び商業は效用を生ずるの力あ

るものであつて、生産的である。農業は其の重農主義的優越の地位から黜けられた。土地、資本及び勞働は生産的過程に於ける協同者と看做された。是れ等のものゝ收入は他の財貨の共れと等しく供給及び需要によつて決定せられ、而して是れ等の價格は其の協同生産物の配當を表示する。彼れは所有及び遺贈の權利を擁護する。（ibid., 1re partie ch. xii.）。彼れは勞働の自由を主張し、組合を攻擊する。即ち曰く、是れ等の不正なる特權は其の既に確立せられたる事實以上に正當なる權利を主張し得ることがないと。彼れは又、利子の徵收を是認し、自由競爭によつて其の歩合を決定せしむ可きことを要求する。（ibid., ch. xviii.）。

六

コンディヤックは貨幣の本質及び用途を論じて、重農學派と一致する。

交換が、終始、貨幣なくして行はれたとしたならば、人々は彼れ等が常に、より小なるものを與へて、より大なるものを受くることを明確に認めたであらう。蓋し、兩當事者の各々は、彼れが彼れに取つて必要なるものに對して、其の餘分に有する所のものを與へたるを知る可きが故である。然しながら、交換の利益は常に平等ではない。或る人は必要なるものを得るが爲めに彼れに取つては餘分なるものを讓渡することある可く、而して他の人は更らに必要の程度大なるものを得るが爲めに彼れに取つて必要なるものを讓渡することある可きである。斯くの如き場合には前者は後者よりも利得する所が大である。價値の共通の尺度としての貨幣の使用は人々を導いて、彼れ等が等しき價値に對して等しき價値を交換するものと思惟するに至らしめたのである。蓋し、貨幣の導入と共に、各々は同一量の貨幣によつて評價せらるゝが故である。貨幣によつて、小麥及び葡萄酒の數量の共れ共れの價値は測定せらるゝを得可く、斯くて又、人々は是れ等のものゝ價値に於いて、其の尺度たる貨幣以外の何物をも見ることがない。

あらゆる他の考量は見失はれて、這般の數量が同一なるが故に、彼れ等は是れ等の數量の各々は價値に於いて同一であると思惟するのである。然しながら、當事者等の比較的利得は彼れ等の相對的欲望の强度によつて見積らる可きであつて、貨幣の絶對量によつて測らる可きではない。（ibid., ch. xv.）。

商人は諸物を卸買して、之れを分賣し、而して其の價格を受け戻す。斯くて持續的小賣は卸買に費されたる高を償ひ、而して這般の償還が行はれたる時は、小賣に於いて償還せらるゝが爲めに、購入は再び大量に於いて行はれる。斯くて貨幣は常に分散せられて、貯水池とも稱す可きものに再び集めらる可く、是れよりして再び多數の小運河によつて擴がり、そは之れを其の最初の貯水池に呼び戻し、此處よりしてそは再び分散し、而してそは再び其處に歸るのである。之れを散布するが爲めに之れを聚集し、又、之れを聚集するが爲めに之れを散布する這箇不斷の運動は「流通」（circulation）と稱せられる。而して、斯くの如き流通は明かに各々の運動に於いて交換を意味する。交換が存しなければ、流通は存することがない。單なる貨幣の輸送は流通ではない。流通に在つては、貨幣は、謂はゞ、他の或る物に其れ自身を變じなければならぬ。（ibid., ch. xvi.）。

コンディヤックは玆に、一國の要する貨幣の數量の價値の見積を行ひ、斯くて又、彼れは間接に貨幣の價値問題を論ずる。我が人民の半ばが都市に居住し、而して、都市に於いては、吾人は人々が村落に於いて費すよりも以上を費すことを知り、從つて又、土地の産物の半ば以上が消費せらるゝものと假定する。吾人の觀念を明かにするが爲めに、土地全體の産物を銀二千オンスに見積ることゝする。斯くの如き假定に基き、都市の住民は産物の半ば以上を消費するが故に、彼れ等は其の生計に取つて必要なる物件の總べてを購入するが爲めに、二千オンス以上の銀を要するであらう。彼れ等は一千二百を要するとする。斯くて、彼れ等は這般の高を以つて足るとしたならば、そ

は全人民の交易を推進するに十分なる可きである。そは農民に渡つて地主に復歸し、而して這般の流通は唯り再び開始せらるゝが爲めに停止せらるゝに過ぎざる可きを以つて、交換が都會及び田舍に於いて行はるゝは常に貨幣の同一數量を以つてゞあらう。是れよりして、商業に取つて要求せらるゝ貨幣の數量は主として都市に於いて消費せらるゝ所のものゝ數量に依存すること、換言すれば、這般の貨幣の數量は凡そ都市の消費する產物の價値に等しきことが推定せられる。(ibid., p. 139-140.)。

而も、コンディヤックは直ちに信用が大なる範圍まで貨幣に代つて使用せられ、而して之れと同一の任務を遂行することを認める。彼れは其の推論中に流通速度の觀念を導入して前述の見積に關して重要なる制限を附することを忘れなかつた。交易に取つて必要なる貨幣數量は事情に從つて變化しなければならぬ。地代の支拂及び信用を以つて購入せらるゝ總べての物の支拂が一年に一度起り、而して斯くの如き勘定を決濟するが爲めに、債務者は一千オンスの銀を要するとする。一千オンスの銀が、是れ等の支拂の關する限りに於いては、流通に要せられる。然しながら、諸支拂が六個月毎に行はれたとしたならば、半額を以つて足る可きである。蓋し、二度に支拂はるゝ五百オンスは一度に支拂はるゝ一千オンスに等しきが故である。諸支拂が三個月毎に生じたとしたならば、二百五十オンスを以つて足る可きことが明かである。(ibid., p. 142.)。然も、彼れは遂に、商業に使用せられ、若しくは使用せられざるを得ざる流通貨幣の精確なる數量を示すことは不可能であると論結しなければならなかつた。(ibid., p. 145.)。而して、コンディヤックは本章中の論述がカンチロンに從へることを自ら告白してゐる。(ibid., p. 143. n.)。

七

斯くの如くして經濟學の大綱を略述せるコンディヤックは、次いで普遍的自由貿易が事物本然の秩序たることを熱心に主張する。彼れは金銀の一百萬が他の生產物の一百萬に比して幾分にても多くの富であると做すの觀念を嘲笑する。產物は最初の富である。汝等と等しく誤れる推論を行ふ他の諸國民も亦、汝等の金銀を自己に引き寄せんことを欲したならば、汝等は如何にせんとするか。斯くの如きは實に是れ等諸國民の行はんとする所である。是に於いて乎、あらゆる國民は外國商品の輸入を抑止せんと試む可きである。而して、彼れ等にして之れに成功したとしたならば、其の必然の結果として、彼れ等自身の商品は他の何れの國にも赴くことなかる可きである。各自貿易の總べての利潤を自己に保留して他に分たざらんことを欲するが爲めに、彼れ等は相互に交易することを廢するに至る可く、斯くて又、彼れ等は總べての利潤を失ふ可きである。斯くの如きは禁止の結果である。然も、何人か敢て歐羅巴が其の非を覺る可きことを確信せんとするか。彼れは斯くの如きを望むも、而も、彼れは偏見の力を知るものであつて、之れを期待することを得ない。之れを要するに、通商は歐羅巴に取つては各國民が利潤を看出す製作物の交換ではなくして、そは各々が他を劫掠せんとする戰爭の狀態である。彼れ等は野蠻時代に於けるが如く、諸國民は唯り其の隣邦を劫掠するに由つて富裕と爲ることを得るものであると思惟する。(ibid, ch. xxix.)。

著者は、本書の第二部に於いて、普遍的自由貿易を以つて其の主張の基礎と爲し、這般の原理の總べての侵犯と之れに對する總べての攻擊とによつて生ぜしめらるゝ有害なる結果を逐次檢討する。斯くの如きものは、戰役、(ibid., 2de partie, ch. iv.)、稅關、通過稅、(ibid., ch. v.)、業務に對する課稅、(ibid., ch. vi.)、特權的及び排他的會社、(ibid., ch. vii.)、消費に對する課稅、(ibid., ch. viii.)、貨幣の改變、(ibid., ch. ix.)、鑛山の採掘、(ibid., ch. x.)、

政府の帶ぶるあらゆる種類の債務、(ibid., ch. xi.)、穀物の輸出入に關する取締、(ibid., ch. xii.)、穀物の國內的流通に關する取締、(ibid. ch. xiii.)、獨占業者の詭計、(ibid., ch. xiv.)、穀物の流通に對する障害、(ibid., ch. xv.)、大首都の奢侈、(ibid., ch. xvi.)、諸國民の嫉妬、(ibid., ch. xvi.)、商人の投機、(ibid., ch. xvii)等である。

八

本書の出版と年を同じうしてアダム・スミスの『國富論』は公にせられた。後者が華々しい成功を贏ち得て、時代を風靡するの概を示したに反し、後者は印刷機より死産して、長く世に顧みられなかつた。シヴァリエ（Michel Chevalier)はコンディヤックを發見せるの名譽をマクラウド(Henry Dunning Macleod)に歸してゐる。彼れの著を以つて、マクラウドの如く、「科學的精神に於いて無限にスミスに卓越する」ものと做すは固より不當であらうが、吾人は、彼れが感覺學派の立場より價値を取り扱ひ、是れを以つて其の學說の出發點たらしめ、以つて後世の限界效用學派に接近せんとせるの點に於いて、本書が價値學說史上に於いて特に重要なる地位を占む可きものであることを認めなければならぬ。ウイリアム・スタンリィ・ジェヴォンズが本書を以つてカンチロンに負ふ所あるを指摘すると共に、之れを original and profound のものと稱揚せることは屢々後の學者によつて引用せらるゝ所であるが、吾人は寧ろコンディヤックが其の價値學說に於いて、效用を見積る判斷に對する費用の影響を閑却せることを遺憾としなければならぬ。

本書はギョーマン(Guillaumin)によつて一千八百四十七年に出版せられた Collection des principaux économistes. の第十四卷 Mélanges d'économie politique. の第一卷中に再刻せられてゐる。彼れの全集は一千七百九十八年には二十三卷として、一千八百〇三年には三十二卷として、一千八百二十一—三年には十六卷としてテリィ（M. A.-F. Théry)によつて上梓せられてゐる。爰には一千七百七十六年版の扉並びに著者の肖像を掲げることゝした。原版は十二折判五百八十六頁より成るものである。